

# 随泉寺寺報

2002 年 2 月号

第 378 号

## 浄土真宗本願寺派 高峯山随泉寺 仏婦講座

講師 湯来町 西法寺住職  
吉崎 哲真師

### 講題 「名前のもつ意味について」

「あかつきの まだくらきより み名となふる 出で入るいきぞ たふと  
かりけり」 斎藤茂吉

夜明け前のひと時、斎藤茂吉は自然の大きに触れながら、しみじみといのちそのものをみつめています。今の安らぎがどこからくるのか、この落ち着きは何なのか。作者はその静けさの中で、しみじみと仏のみ名を称えます。

その息の白さを見つめ、呼吸しているわが身に注がれる仏のめぐみを感じて、作者は満ち足りた思いに包まれていたのでしょうか。甲斐和里子さんのうたに「みほとけの み名をととなふるわがこえは わがこえながら たふとかりけり」という歌があります。愚痴の出やすい口であり、悲しみの言葉や、時には怒りの言葉も出てくる私の口ではあるが、今、み仏のみ名を称えているわが声は、わが声ながら なんと尊いことであろうかと、仏の慈悲のぬくもりに浸っている歌です。

#### 2 月の行事予定

2 月 14 日 昼席午後 1 時より…… 仏婦講座

2 月 14 日 夜席午後 7 時半より…… 出張法座 望ヶ丘 集会所

2 月 15 日 朝席午前 10 時より…… 会員物故者追悼法要 **お斎**

2 月 15 日 昼席午後 1 時より…… 仏婦講座

## ふるさとへの想い

鎌田哲成

《ぼく、退院した時思ったんだ。ぼくのふるさとって家かなって》  
先月の寺報で《一筆啓上 ふるさとへの想い》をのせましたら  
いろいろな人が読んでくださり、ふるさとの想いと言うのは  
いろいろあるなぁと感じました。

上記の言葉はおそらく小学生か、中学生でしょう。初めて家を離れて入院した。不安だったんでしょ。家に帰って安心した。  
ほっとした。ふるさととは安心するものです。ほっとするところ  
です。

《ふるさとよ、ぼくは、君のことは、わからないけど、君は、  
ぼくのことわかってるみたい。》これもおそらく中学生ぐらいの  
言葉でしょう。今まさにふるさとの中に抱かれているのだけれども、  
その愛情の深さがよくわからない。

《ふるさとがない者にとって、ふるさとという言葉は、意味の  
ない悲しい言葉です。》ふるさとがないという人は、気の毒なよ  
うな気がします。しかしふるすとは たんに家族だけでなく、先  
生も 近所のおばさんも、ふるさとの一部です。ふるさとという  
のは、多面性です。山があつて、海があつて、雪がふつて、あた  
たかい笑顔があつて、ということだけではなく、怒られたことと  
か、悲しいこととか、自分の生きた時間そのものが、ふるさとな  
のかもかもしれません。

《いつのころからか、「かえる」が「行く」に変わった。私本  
当に巣立ったのですね。少しさびしい。》わかるような気がし  
ます。そのターニングポイントはどこなんでしょう。ひょっとし  
たら待っていてくれた人がいなくなった時から、それとも自分が  
ふるさとになったときから？

#### ありがとうございます。

特別永代経	一金 三十万円也	平原千鶴子	様
特別懇志	一金 二十万円也	平原千鶴子	様
門信徒会	金一封	平原千鶴子	様